

論文審査の結果の報告

平成 31 年 2 月 18 日

申請者： 新村 衣里子

論文題目： 『曾我物語』の虎御前にまつわる伝承の生成と展開
－東アジア文化における虎表象の視点から－

日本のいわゆる三大仇討ちの最古、鎌倉初期の曾我兄弟による事件は長く語り継がれて文學・演劇などの素材となった。『曾我物語』はそれらの源泉をなす中世軍記物語である。今回の論文は、その成立事情と背景、物語の形成とその後の展開と影響などを多角的に扱って軍記物語研究に一石を投じた研究である。

特に重点を置いたのは、兄十郎の恋人、相模国大磯の遊女「虎御前」である。彼女は物語のヒロインであり、仇討ち以後の記事で亡き兄弟の菩提を弔いつつ、諸国を行脚・遍歴を重ねるさまが描かれ、後年の往生が物語の結末に描かれている。

論文は、彼女の名が「虎」であった点に注目する。十二支の一つ（寅）であり、この語からただちに想起される動物の虎は当時もそれ以後も当分の間、日本人にとって見知らぬものではなく、中国・朝鮮など異国性と結びついて理解、想起されていた。それを名に持つ女性がなぜ『曾我物語』で重要な役割を担っているかについて論文は、彼女が大磯の遊女であった事、物語の成立期が元寇の役を中心に東アジアとの緊張関係にあった事、物語の内容や成立に関わる地域に渡来人文化に縁があるものが多い事などに注目して、それらの示唆する問題点を扱っている。

その中から浮かび上がってきたのは、虎御前関係記事に東アジアの虎、ないし虎表象との縁が認められる事、虎御前が遊女として兄弟と出会った東海道の大磯は中世に於いて朝鮮半島からの渡来人系の文化がいきづく、異国性豊かな土地である一方、京都との縁が王朝期以来続いて重んじられてきつつ、繁栄していた事、さらには、箱根や伊豆山、高麗山などの霊地を拠点とする回国の人々の行動範囲に近い事であり、それらの関与についての従来指摘されていた事を摂取、発展させて新たな問題点を探っている。終章では、虎御前を中心とする多様な曾我関係の伝承が全国的規模で存在する事をまとめ、曾我兄弟の仇討ちが、いかに日本人の記憶に著しい刻印を残したかを指摘している。『曾我物語』は、古態を留める真名本と後世普及して他ジャンルの源泉にもなった仮名本とがあり、その位置づけや扱いについても論の全体にわたって慎重かつ穏当であろう。

『曾我物語』の研究の問題領域を拡大し、一石を投じて所期の研究目的を高度に達成しており、この内容と方向性、依拠した研究法などは、昨年までに活字、口頭の両面から何度も発表して一定の評価をすでに関係学界に於いて勝ち得て今後に向けて期待されている。

以上、総合的に検討し、十分学位に値すると思われる。平成 31 年 2 月 13 日（水）東京紀尾井町キャンパスにおいて口述審査を実施し、今後への展望も含めて長時間にわたる質疑応答を展開し、納得の行く本人からの回答を得たので、協議の上、合格の判定を下した。

審査員（主査）： お茶の水女子大学 名誉教授 三木 紀人

審査員（副査）： 人文科学研究科 岡田 美也子

審査員（副査）： 人文科学研究科 倉林 眞砂斗

審査員（副査）： 人文科学研究科 飯倉 章